



【アーティストサポート】へ、多くの皆様からお気持ちをお寄せいただきましたことに、心より感謝申し上げます。
寄せられたご支援は、アーティストの様々な活動に幅広く使っていただいております。

「人のいるところには夢がある」創業48年来のジャパン・アーツの理念です。
どんな時代においても、音楽・芸術から生まれる感動は、
人々に夢・希望・生きる力を与えてくれます。

これまでの活動レポートは、ジャパン・アーツのホーム・ページに掲載しておりますので、どうぞご覧ください。
今年度も変わらぬご支援をどうぞよろしくお願いいたします。



アーティストサポートの詳細はこちらをご覧ください。

2024年度ご支援いただいた皆様

<2024年度 年間サポート>

井上豊 上原啓子 上村憲裕 M.U K.O S.O 小田島容子 片山由美子 H.K
K.K 栗田美知子 新貝康司 M.S M.T R.T A.D
トゥルーラブ真智子 トゥルーラブ真凜 K.N 兒子弥生 S.N M.H 平山美由紀
藤野盾臣 松尾芳樹 真野美千代 J.M M.M (株)青林堂
(匿名希望 13名)

<2024年 ウィーン少年合唱団 オフタイム・サポート>

井口和美 K.K Rimiko M.H M.M 真野美千代 水足久美子
水足秀一郎 ロロコミ・リリコミ
(匿名希望 12名)

<2024年 ウィーン少年合唱団 ツアー・サポート>

井口和美 T.O K.K Rimiko M.T 平山美由紀 細沼康子 M.M
真野美千代 村瀬治男 ロロコミ・リリコミ
(匿名希望 11名)

2024年8月29日現在 敬称略

ご支援についての詳しい内容は、どうぞ下記へお問い合わせください。

株式会社ジャパン・アーツ アーティストサポート係 Tel.03-3499-7720 (平日11:00~17:00 年末年始を除く)



諏訪内晶子 & オリオン・ワイス デュオ・リサイタル Akiko Suwanai & Orion Weiss Duo Recital

©Lisa-Marie Mazzucco

©Marco Borggreve

2024年9月12日(木) 19時開演
東京オペラシティ コンサートホール

7:00 p.m. Thursday, September 12, 2024 at Tokyo Opera City Concert Hall

主催: ジャパン・アーツ
協力: ユニバーサル ミュージック



文化庁 劇場・音楽堂等における
子供舞台芸術鑑賞体験支援事業

ブラームス:

J. Brahms:

ヴァイオリン・ソナタ 第1番 ト長調 Op.78「雨の歌」

Violin Sonata No.1 in G major, Op.78

第1楽章：ヴィヴァーチェ・マ・ノン・トロッポ	1st Mov.: Vivace ma non troppo
第2楽章：アダージョ	2nd Mov.: Adagio
第3楽章：アレグロ・モルト・モデラート	3rd Mov.: Allegro molto moderato

* * *

ヴァイオリン・ソナタ 第2番 イ長調 Op.100

Violin Sonata No.2 in A major, Op.100

第1楽章：アレグロ・アマビレ	1st Mov.: Allegro amabile
第2楽章：アンダンテ・トランクイッロ - ヴィヴァーチェ	2nd Mov.: Andante tranquillo - Vivace
第3楽章：アレグレット・グラツィオーソ (クワジ・アンダンテ)	3rd Mov.: Allegretto grazioso quasi Andante

ヴァイオリン・ソナタ 第3番 ニ短調 Op.108

Violin Sonata No.3 in D minor, Op.108

第1楽章：アレグロ	1st Mov.: Allegro
第2楽章：アダージョ	2nd Mov.: Adagio
第3楽章：ウン・ポーチ・プレスト・エ・コン・センチメント	3rd Mov.: Un poco Presto e con sentimento
第4楽章：プレスト・アジタート	4th Mov.: Presto agitato

諏訪内晶子&オライオン・ワイス 2024年日本公演スケジュール

9月 6日(金) [名古屋]	愛知県芸術劇場コンサートホール	主催：クラシック名古屋
9月 7日(土) [大垣]	大垣市サイトピアセンター 文化ホール	主催：(公財)大垣市文化事業団
9月 8日(日) [川崎]	ミュウザ川崎シンフォニーホール	主催：神奈川芸術協会
9月12日(木) [東京]	東京オペラシティ コンサートホール	主催：ジャパン・アーツ
9月14日(土) [大阪]	ザ・シンフォニーホール	主催：ABCテレビ
9月15日(日) [西条]	西条市総合文化会館 大ホール	主催：西条市総合文化会館



諏訪内晶子 (ヴァイオリン)

Akiko Suwanai, Violin

1990年史上最年少でチャイコフスキー国際コンクール優勝。これまでに小澤征爾、マゼール、デュトワ、サヴァリッシュ、ゲルギエフらの指揮で、ボストン響、フィラデルフィア管、パリ管、ロンドン響、ベルリン・フィルなど国内外の主要オーケストラと共演。BBCプロムス、シュレスヴィヒ=ホルシュタイン、ルツェルンなどの国際音楽祭にも多数出演。

近年ではゲルギエフ指揮ロンドン響とのツアー、パリ管とのヨーロッパおよび日本ツアー、チェコ・フィルとの中国ツアーを行い、オスロ・フィル、バンベルク響、デトロイト響、トゥールーズ・キャピトル管とも共演。

現代作曲家作品の紹介も積極的に行い、これまでにエサ=ペッカ・サロネン作曲「ヴァイオリン協奏曲」の日本初演(2013)、エリック・タンギ作曲「In a Dream」の世界初演およびフランス初演(2013)、キャロル・ベッファ作曲「ヴァイオリン協奏曲-A Floating World-」の世界初演(2014)などに取り組んでいる。

2012年、2015年エリーザベト王妃国際コンクール、2018年、2023年ロン・ティボー国際コンクール、2019年チャイコフスキー国際コンクールヴァイオリン部門審査員。2012年より「国際音楽祭 NIPPON」を企画制作し、同音楽祭の芸術監督を務めている。

レコーディングでは、デッカ・ミュージック・グループとインターナショナル・アーティストとして専属契約を結んでおり、最新作「ブラームス・ヴァイオリン・ソナタ集」を含む16枚のCDをリリースしている。

桐朋女子高等学校音楽科を経て、桐朋学園大学ソリスト・ディプロマコース修了。文化庁芸術家在外派遣研修生としてジュリアード音楽院本科及びコロンビア大学に学んだ後、同音楽院修士課程修了。国立ベルリン芸術大学でも学び、2021年学術博士課程修了、ドイツ国家演奏家資格取得。

使用楽器は、日本にルーツをもつ米国在住のDr. Ryuji Uenoより長期貸与された1732年製作のガエルネリ・デル・ジェズ「チャールズ・リード」。



Akiko Suwanai, Violin



オリオン・ワイス (ピアノ)

Orion Weiss, Piano

同世代で最も引く手あまたのソリストおよび室内楽共演者のひとりであるオリオン・ワイスは、「力強いテクニックと非凡な洞察力」(ワシントン・ポスト)を持つ「才気あふれるピアニスト」(ニューヨーク・タイムズ)として広く知られている。シカゴ響、ボルティモア響、ボストン響、サンフランシスコ響、フィラデルフィア管、ロサンゼルス・フィル、ニューヨーク・フィルを含む北米の多数のオーケストラと共演し、世界中の主要なコンサートホールや音楽祭に出演している。

2023/24シーズンの主な活動には、マイケル・ティルソン・トーマス指揮シカゴ響、ケン=デイヴィッド・マズア指揮ワシントン・ナショナル響との共演、アウグスティン・ハーデリヒとケネディ・センターで共演、2024年5月カーネギー・ホールへの出演が含まれる。また近年、ルツェルン音楽祭、リンカーンセンター室内楽協会、ケネディ・センターのフォータスシリーズ、92番街Y、アスペン、バード、ラヴィニア、シアトル、グランドテイトンなどの夏の音楽祭に出演している。

室内楽を好むことで知られ、ヴァイオリニストのアウグスティン・ハーデリヒ、ジェイムズ・エーネス、ピアニストのマイケル・ブラウン、シャイ・ウォスナー、そしてアリエル弦楽四重奏団、パーカー弦楽四重奏団、パシフィカ・カルテットと定期的に共演している。

ワイスの録音はNaxos, Telos, Bridge, First Hand, Yarlung, Artekの各レーベルから出ており、2024年8月にはハーデリヒとの共演で、アメリカの作曲家の作品集「American Road Trip」をリリース。

これまでにクラシック・レコーディング財団のヤング・アーティスト・オブ・ザ・イヤー、ギルモア・ヤング・アーティスト賞、エイヴリー・フィッシャー・キャリア・グラント、ミエチスラフ・ミュンツ・スカラシップを授与されている。オハイオ生まれ。クリーヴランド音楽院とジュリアード音楽院に通い、後者ではエマニュエル・アックスに師事した。



Orion Weiss, Piano

西原 稔 (音楽学) Minoru Nishihara

ブラームスのヴァイオリン・ソナタ

ブラームスが完成・刊行したヴァイオリン・ソナタは3曲であるが、彼は1853年秋にシューマンを訪問した際に、イ短調のヴァイオリン・ソナタを持参している。しかしこの作品はその後破棄された。《ヴァイオリン・ソナタ第1番》は《交響曲第2番》の創作後、《ヴァイオリン協奏曲》と連続して作曲され、《ヴァイオリン・ソナタ第2番》と同第3番は《交響曲第4番》の完成後に創作されており、これら3曲はブラームスの交響曲の創作時期と連続している。彼のヴァイオリン・ソナタは歌曲との結びつきを特徴とし、この時期に作曲された《交響曲第2番》や《ピアノ協奏曲第2番》でも自作の歌曲が用いられている。《ヴァイオリン・ソナタ第1番》は歌曲《余韻》の旋律を用い、第2番は《歌の調べのように》との関連が注目されている。第3番の第2楽章の表現はすぐれて歌曲的である。またこれらのソナタでは特定のリズムや音程、音が強調して用いられているのも注目される。

ヴァイオリン・ソナタ 第1番 ト長調 Op.78 「雨の歌」

この第1番のソナタは1878年と79年の二つの夏を使って避暑地ベルチャハで作曲された。作品はブラームスと親交のあったクラウス・グロートの詩による自作の歌曲《雨の歌》および《余韻》作品59の主題を第3楽章に用いていることから、《雨の歌》の名で知られる。この作品はシューマンの遺児で、ブラームスが名付け親となったフェーリックスと結びついている。彼は若くして結核を患う。病気を案ずるブラームスは第2楽章の冒頭24小節を書き、その裏面にフェーリックスの病気を気遣い、クララ・シューマンの心情を慰める手紙を書き送る。しかし上記のブラームスのクララ宛ての手紙の返信で、ブラームスはフェーリックスが1879年2月16日に亡くなったことを知る。作品が完成するとブラームスは作品をクララに送付し、作品を受け取ったクララは深く心を動かされ、「私ほどこの旋律を歓喜と哀愁に満ちて感じる者はほかにはいないでしょう」と語り、とくに第3楽章について「あの世に持ってきたい」とのべている。作品は1879年11月8日、ロベルト・ヘックマンのヴァイオリン、マリー・ヘックマン=ヘルティのピアノで公開初演された。

第1楽章：ヴィヴァーチェ・マ・ノン・トロポ、ト長調、4分の6拍子。ピアノの奏するト長調の主和音の上に優美に提示されるヴァイオリンの旋律は、気品ある優雅なたたずまいの落ち着いた楽想で、語りかけるような親密さをもっている。冒頭のリズムは、第3楽章の主題冒頭の二音連打のリズム形に基づいている。楽章はソナタ形式で構成されている。

第2楽章：アダージョ、変ホ長調、4分の2拍子。クララに送付された楽譜の速度表示はアダージョ・エスプレッシーヴォであったが、最終稿はアダージョに変更されている。大きな溜息のようなドミナントの和音で開始する主題は、クララをいたわる心からの気持ちが滲み出ている。この楽章は3部形式で構成され、中間部はロ短調で、厳かな付点リズムを特徴とする。

第3楽章：アレグロ・モルト・モデラート、ト短調、4分の4拍子。この楽章の主題は同じ年に作曲された《5つの歌曲》の《雨の歌》の追想である《余韻》に基づき、歌詞の韻律に由来する同音連打のリズム動機が用いられている。楽章はロンド形式で構成され、楽章中に第2楽章冒頭の溜息を思わせる動機が回想され、フェーリックスとクララに対するブラームスの心からの慰めの音楽となっている。

ヴァイオリン・ソナタ 第2番 イ長調 Op.100

《交響曲第4番》を完成・初演した彼は、風光明媚なトゥーン湖畔でこのソナタを完成した。この年に彼は《チェロ・ソナタ第2番》や《ヴァイオリン・ソナタ第3番》、《ピアノ三重奏曲第3番》も作曲している。作品は知人のヴィトマンの私邸で私的に初演された後、1886年12月2日、ヘルメスベルガーのヴァイオリン、ブラームスのピアノで公開の初演が行われた。

第1楽章：アレグロ・アマビレ、イ長調、4分の3拍子。この楽章の主題はヴァイオリンとピアノとの対話からなり、4小節間をピアノが奏すると第5小節でヴァイオリンがそれに応えるという5小節で主題が構成されている。またこの第1主題では4度の音程が重要な表現の役割を担っている。第2主題は〈歌の調べのように〉の旋律との関連性が注目されている。

第2楽章：ヘ長調、4分の2拍子。アンダンテ・トランキッロの部分とヴィヴァーチェの部分とが交代する構成になっている。主要主題では第1楽章で用いられた4度音程の表現が注目される。このアンダンテ・トランキッロの部分の次に、これとは対照的な急速なヴィヴァーチェの部分が続く。

第3楽章：アレグレット・グラツィオーソ（クワジ・アンダンテ）、イ長調、2分の2拍子。ロンド形式で構成され、穏やかな主要主題ののち、低い音域から湧き上がる分散和音の動機の間主題は強いコントラストを生み出している。

ヴァイオリン・ソナタ 第3番 ニ短調 Op.108

トゥーン湖畔での滞在第1年目の1886年8月8日にこのソナタの第1楽章を医師で友人のビルロートに送付し、ブラームスは彼の日記に「1886年8月」と記していることから、作品は8月に一応の完成を見たと考えられるが、ヘルツォーゲン夫妻らの助言を入れて推敲を重ね、2年以上をかけて1888年末に完成をみた。1889年11月（日付なし）のクララ宛の手紙はこう語る。「貴女の指の下でこのニ短調のソナタが柔和で夢見るように弾かれることは私にとってとても心地よく心むもものです」。1894年にクララはヨアヒムとこの作品を演奏した時、クララは、「この曲は滅多に経験の出来ない純粋な喜びです。第1楽章の沸き立つような和音を聴くと、いつも雲の中をかけていくような気持ちになります。このソナタの一つ一つの楽章が口には言えないくらい好きです」と、この作品の演奏の喜びをのべている。作品は1888年12月21日にイエネー・フーバイのヴァイオリンとブラームスのピアノによりブダペストで公の場で初演され、作品は指揮者でブラームスの理解者であるハンス・フォン・ビューローに献呈された。

第1楽章：アレグロ、ニ短調、4分の4拍子。張りつめた「イ音」がこの楽章の性格を決定している。また主題提示部における冒頭の動機は、第1主題の結尾でシンメトリックに繰り返され、第1楽章の締めくくりの部分でも繰り返される。展開部ではピアノの左手の奏する「イ音」が持続低音として用いられて強い緊張感を生み出している。

第2楽章：アダージョ、ニ長調、8分の3拍子。ヴァイオリン独奏がG線で奏され、重い音色が歌曲のような深い安息感と魂の慰安を与えてくれる。ピアノは4度音程を繰り返し用いるが、この動機は第1楽章の主題の動機でもある。

第3楽章：ウン・ポーコ・プレスト・エ・コン・センチメント、嬰ヘ短調、4分の2拍子。冒頭でヴァイオリンの奏する旋律は休符をはさんで3度音程で下行し、虚ろな楽想が醸し出されている。

第4楽章：プレスト・アジタート、ニ短調、8分の6拍子。激しく情熱的な楽章で、ロンドソナタ形式による。この楽章でも第1楽章におけるイ音の保持音は第4楽章においても旋律の要になっている。